

## 代動詞 do

英語には様々な特徴がありますが、他の言語にはない英語だけの特徴とは何だと思いませんか。疑問形や否定形で出てくる do がそうです。いろんな言葉を齧ってきましたが、こんなものは見たことがありません。

その成立ちは強調の助動詞 do に由来すると考えてよいかと思えます。I do help you. do を can のような助動詞と考えると Do I help you? 否定形は I do not help you. ぴったりですね。三人称や過去形にしても OK です。do は昔は make などと同じく使役動詞の用法があったが、それが弱まって、強調の助動詞として使われるようになったとのこと。

現代英語の規則としては、もはや do に強調の意味はなく、一般的に、疑問文や否定文では助動詞＋原形本動詞を使用し、繰り返しを避けるための代示形 (Yes, I do や as I can など) では本動詞を使用せず代わりに助動詞を使い、そうした場合に他の助動詞がなければ do を使用しなければならないということ (be と have は助動詞扱い)。そしてこの do が時制や人称変化といった文法機能を担い、本動詞は無変化になります。この現象は Do-support と呼ばれていますが、昔からあった英語固有の特徴ではありません。14世紀後半になってやっと現れ、疑問文では16世紀に拡大したが、否定文では普及が百年遅れたそうです。言い換えると、17世紀半ばミルトンの時代にもまだ do を使わない動詞＋not というドイツ語と同じ語順が半ば残っていました。

I know not how to tell thee who I am: (Romeo and Juliet; 1597) 因みに私共が1950年代に学校で習った英語では英国流の Have you a pen? No, I have not a pen. でしたが、今は米国流の Do you have...、I don't have... が一般的ですよね。この一般動詞 have に do を使う用法は比較的新しく、文献に現れるのは18世紀末だそうです。そのうちに助動詞の have も Do you have been... になり、何世紀か後には Are you... も Do you be... になるのでしょうか。黒人英語では既に don't be が使われているそうです。実は、肯定形に助動詞 do を使う用法もあったそうで、疑問文や否定文よりも早く13世紀初めに韻文で出現し、16世紀には少しは使われていたが、その後には衰退していったとのこと。

代示形に do 相当語を使う用法の方は、古英語でも見られ、スウェーデン語 göra など他の言語にもあります。þonne beo we sittende be þæm wege, swa se blinda dyde (Then we should be sitting at the way-side, as the blind man did)

なお、don't などは短縮形になると元の形とは異なる振舞いを示します。つまり、疑問形での not と n't の位置が違ってきます。can など他の助動詞でも同様ですね、この現象も不思議と言えば不思議です。Do you not speak ...? / Don't you speak ...? don't に関して面白い話があります。日記や私信などの調査によれば、don't は17世紀前半に出現し同世紀後半には一般化していたが、doesn't が一般化するのには19世紀半ば以降で、それまでは三人称単数でも don't が普通に使われていたそうです。そしてアメリカ英語で doesn't が一般化するのには20世紀後半だとのこと。can't も17世紀頃からとされています。

他の言語にはないと言いましたが、実は灯台下に類似の使い方がありました。「飲んだり食べたりする」「飲みも食べもしない」の“する”は代動詞に近い感じがします。もう少し詳しく検討すると、動詞の連用形に副助詞「は、も、こそ、さえ、まで、たり、でも、など」を添えたいとき、代動詞“する”の出番になるようです。「言いはしない」は強調の意味で使われます。「言いはせぬ」の s が h になってできたのが関西弁の否定形「言わへん」です。使い方も英語と似ていますよね。もはや強調の意味はなく、否定の通常形です。四国などでは中間形の「言いやせん」などが残っています。

話が脱線しますが、関西弁で代動詞“する”を使わない否定形は主に、可能を表す「よう言わん」の形で残っています。“よう”は“え(得)”に由来するとの説があります。一見すると“良く”wellかと思うのですが、明らかに“良く”に由来する意味である「よう言うよ」(よくも言えたな)の“よう”と不可能の場合の「先生によう話さん」(話せない)の場合の“よう”とはアクセントの形が違うので、由来が異なることは明らかです。

アイヌ語でも否定の場合に似た言い方をするようです。代動詞を使わない言い方もありますが、使う方が普通だとのこと。田村すず子著『アイヌ語沙流方言辞典』(1996年)のkiの項に「代動詞として、つまり本動詞のあとに副詞(連用語)や名詞(主語・目的語)が補われたり、また副助詞がついたりした場合に、そのあとにkiを置くことによって再び全体が動詞句として機能する、つまり文を終止したり次に助動詞や接続助詞等々が続いたりすることができる。」とあります。したがって、日本語とほぼ同じ使い方です。

hapo iruska ka somo ki. 直訳すると(母は怒りもしない)kaは“も”の意味の副助詞、kiは“する”です。  
hapo somo iruska. (母は怒らない) 代動詞を使わない言い方だと否定語somoが動詞の前に付きます。  
Kusur ta patek nuwe an ranma ki p ne yak a=ye. (釧路でばかりいつも[それが]たくさん取れるのだそうだ)  
a=kopásrota a=ukókikkikpa a=onáha ka a=unúhu ka ki. (私は父も母も罵ったりボカボカ殴ったりした)

韓国語にも類似の用法がありました。韓国語の否定形には、動詞の直前にanを置く他に、動詞の連結語尾(連用形)-ji/ciの後に否定詞ani+hada(do)を置く用法もあり、こちらは連用形の後に副助詞がないけれども、まさに“～し(は)しない”の形です。その短縮形が助動詞anta(しない)です。

keu-neun chaeg-ul an ilgeotta. keu-neun chaeg-ul ilji ani hatta/anatta. (彼は本を読まなかった)  
この他に、agi-neun ul-go ut-go haetta. (赤ん坊は泣いたり笑ったりした)や anjat-daga seot-daga haetta. (立ったり座ったりした)という表現があります。後者はもう少しニュアンスを出すと「座っては立ち座っては立ちした」、文脈によっては「居ても立ってもおられなかった」のニュアンスになることもあるそうです。-dagaも-goも動詞の連用形“～して”を作る接尾辞です。これも日本語で連用形に副助詞を付けた場合とほぼ同じです。

英語最大の特徴、代動詞doの話は、これ以外に似た例が見つからないので、これでお仕舞いなのですが、これだけでは寂しすぎるので、他の言語での一般疑問文と否定文の表し方について纏めておきましょう。

## 疑問文

一般疑問文の作り方には、主に次のようなものがあります。(一般疑問文とはyes/noで答える疑問文で、是非疑問文、真偽疑問文、諾否疑問文、決定疑問文などとも呼ばれます。それ以外の疑問文には、orを使う選択疑問文、疑問詞を使う疑問詞疑問文、isn't it?などで念を押すときの付加疑問文があります。)

イントネーション：ほとんどの言葉ではイントネーションだけで疑問を表すことができます。しかし中にはイントネーション以外には疑問文を表す手段がない、またはあってもほとんど使わない言語もあります。ポルトガル語、スペイン語、イタリア語、ルーマニア語などのロマンス諸語；その他にハワイ語などのポリネシア諸語、ギリシア語、チェコ語、パンジャブ語があります。スワヒリ語の一般疑問文もこの形が普通ですが、文頭にje-を付ける言い方もあります。文章では文末に疑問符を付けるだけになります。(スペイン語では、文頭にも逆疑問符¿を付けます。読み上げる際などに最初から疑問文であることが分かるようにするためだそうで、18世紀半ばにアカデミアで制定されました。スペイン語では逆感嘆符¡も使います。)

倒置：英語、ドイツ語、フランス語で見ると、かなり一般的な方法と思いがちですが、他には北歐諸語などほぼゲルマン系に限られるようです。英語以外では代動詞は使わず、単に主語と動詞を倒置します。

なお、前述のように英語も数百年前まではdoを使わず、ドイツ語などと同じく単なる倒置形を使っていました。この倒置形は古英語の時代からみられ、また北歐ノルド語の古い形をよく保存しているアイスランド語でも使われており、定動詞を文頭の次に置くV2語順との絡みもあってゲルマン諸語で昔から使われていたと考えられます。なお、イントネーションによって疑問を表すイタリア語やチェコ語でも倒置形をとることはあるそうです。SVO型で語頭強勢をもつことが倒置形をとる条件だとの説があります。

中英語：Gaf ye the child any thyng? (gave you the child any thing?) (Wakefield plays 15世紀初)

オランダ語：Je drinkt koffie. (You drink coffee) → Drink je koffie?

スウェーデン語：Du dricker kaffe, → Dricker du kaffe?

フランス語では、三人称単数で動詞が母音で終わる場合には、母音の連続を避けるために動詞と代名詞の間に-tを挿入します。また、主語が名詞の場合は、複合倒置と言って人称代名詞も使う形になります。

Elle aime la France. (She loves French) → Aime-t-elle la France?

Caroline est Française. (Caroline is a French woman) → Caroline est-elle Française?

多くの言語では疑問辞を使って疑問文を作ります。(ある調査によれば955語中585語)

文頭に疑問辞：疑問文であることを表す言葉を文頭に付ける言語は沢山あります。

古代ギリシア語 ἄρα、ヒンディー語 kyā、ネパール語 ke、ペルシア語 āyā、アラビア語 hal/ a、ヘブライ語 haim/ha、スワヒリ語 je、インドネシア語 apakah、エストニア語 kas、ラトビア語 vai、セルビア語 da li、スロベニア語 ali、ポーランド語 czyがその例です。ポーランド人のザメンホフはエスペラントでこの文形を採用しました。

Po. Znasz mnie. (You know me) → Czy znasz mnie? Es. Vi konas min. → Ĉu Vi konas min?

フランス語には平叙文の文頭に est-ce que (is it that ...) を付けて疑問文にする方法があります。

この疑問辞の起源について、セルビア語の *da li*、スロベニア語の *ali*、ポーランド語の *czy* とラトビア語の *vai* には、*or* や *whether*、エストニア語の *kas* には *whether* の意味もあります。“かどうか” という意味の語を文頭に載せたことになります。

現代の英語では *whether* を使うのは間接疑問文だけですが、古英語では *hwæðer* (*whether*) を文頭に置いて疑問文を作る用法もあったそうで、倒置はせずに、主語＋動詞の順序を保存しています。

*Hwæðer ge nu secan gold on treowum?* (Whether you now seek gold in trees?) (Boethius、9世紀後半訳)

サンスクリットでは、疑問代名詞の中性単数主格 *kim* (*what*)、またはその男性単数主格に不定を表す語尾 *cid* を付けた *kaścit* を文頭に置きます。ヒンディー語の *kyā*、ネパール語の *ke* やインドネシア語 *apa* も本来は疑問詞 *what* です。Ml. *Anda tahu saya.* (You know me.) → *Apakah* anda tahu saya?

時制などによって使う疑問辞が異なる言語もあります。アイルランド語では現在形には *an*、過去形には *ar* を使うそうです。また、否定疑問には現在形で *nach*、過去形で *nár* を使います。

文末に疑問辞：日本語の *か* や *の* のように文末に疑問辞を置いて疑問文を作る言語も沢山あります。朝鮮語 *-kka*、モンゴル語 (*-x*) *oo/uu/öö/üü*、中国語 嗎、沒有 (過去の疑問文)、タイ語 *lu/mǎi* (*mǎi* は否定語)、ビルマ語 *lâ*、タミル語 *-ā*、ハウサ語 *kō/nē* などがそうです。カンボジア語の *ru:tèt* は *or not* の意味で、どちらか一方でもかまわず、名詞文の場合は *ru:tèt* だけを使います。

你会說日語嗎？ 你有看過那部電影沒有？

上記の疑問辞の中には、日本語の *か* のように、疑問詞疑問文にも同じものを付けるものがあります。朝鮮語 *-kka* などがそうです。ビルマ語では *lâ* の代わりに *lê* を付けます。沖縄語では、一般疑問文では文末に *イ* を、疑問詞疑問文では *ガ* を付けます。

バスク語は、語順が複雑ですが、文末の動詞または助動詞の前に疑問辞 *al* を置くようです。

焦点語の後に疑問辞：話題の焦点語の後に疑問辞を置く言葉も、意外に沢山あります。

焦点語、特に動詞を文頭に置いてその後に疑問辞を続ける言語が多そうです：ラテン語 *-ne*、ロシア語 *ли*、セルビア語 *-li*、フィン語 *-ko*、ハンガリー語 *-e* (普通は抑揚のみ) がその例です。

La. *Tu es Caesar.* (You are Caesar.) → *Esne* tu Caesar?

Hr. *Imate plan grada.* (You have a city map.) → *Imate li* plan grada?

タガログ語の疑問辞 *ba* は、文頭の焦点語、主に動詞や補語の後に置き、*ka* (*you*) があるときはその後に置きます。ハワイ語の *anei* も文頭の動詞の後に置きます、ベンガル語 *ki* は、通常は文頭の主語の後に来ますが、他の場所も可能です。

肯定文の語順を変えずに任意の焦点語の後に自由に疑問辞を置くことのできる言葉もあります。

トルコ語では、焦点語の後に *-mi* を置きます (母音調和で *-mİ*、*-mi*、*-mu*、*-mü* の4つの形があります)。断定・過去の動詞語尾や人称語尾など一部の接辞はそのあとに付きます。

ウズベク語など他のテュルク系の言語では置く位置が限られているようで、アゼルバイジャン語では文末と動詞の前だけだそうです。

Siz dün okula gittiniz mi? (あなたは昨日学校へ行ったか)

Siz dün okula mi gittiniz? (あなたが昨日行ったのは学校か)

Siz dün mü okula gittiniz? (あなたが学校へ行ったのは昨日か)

Siz mi dün okula gittiniz? (あなたが昨日学校へ行ったのか)

インドネシア語でも-kahを任意の焦点語に後接することができ、また文末に置くこともできます。

Benarkah jawaban saya? (Is my answer correct?)

ウェールズ語口語では現在形を助動詞 bod (be) の現在形 yd-を使って、能動形では r-yd-+主語-'n+動名詞の形で表しますが、r-を取り除いて yd-+主語-'n+動名詞にすると疑問文になるそうです。つまり、文頭の助動詞に前置する肯定辞を取り除くことによって疑問文を作るわけです。

反復：中国語では「是不是」のように述語の後にその否定形を置いて疑問文を作る方法があります。否定形の部分は、文末に移すこともできます。インドネシア語でも、否定語 tidak、bukanなどを文末に置いて疑問文を作ることができます。文末に置く形は、英語の付加疑問文と発想が似ていますね。

你会不会説日語? (日本語話せますか) 你有没有看過那部电影? (あの映画見たことありますか)

你会説日語不会? 你有看過那部电影没有?

動詞の前後を挟む：ベトナム語では、動詞の前に có (have) を、文末に không (not) (完了の疑問には chura) を置きます。

以上のような様々な方式がありますが、ラテン語とロマンス諸語や、スラブ諸語のように同族語でも必ずしも同じ方式を取らないことが注目されます。同じ西スラブ諸語であるポーランド語とチェコ語でも違っています。つまり疑問を表す方式は後から生まれたことになります。

また、中国語のように複数の方式を持つ言葉も結構あります。

否定疑問文に対する答え方ですが、日本語のように内容肯定でハイで答える言葉にはビルマ語、タイ語やタガログ語があります(フィリピンでは英語でも同じ使い方をする人が多いそうです)。モンゴル語、トルコ語、ロシア語、中国語でもそうだとすることで、ロシア語では内容否定するときに、Ты не студент? (Are you a student?) に対して Да, Я студент. (Yes, I am a student) と、да (yes) で答えることだけはできないそうです。中国語では純粹に質問する否定疑問には内容肯定しますが、確認などのための否定疑問では肯定疑問文と同様に答えるそうです。つまり相手の意図に応じて答え方を換えるわけです。日本語でも同様の現象が見られ、このタイプの言語に共通する現象かもしれません。

你不是老師嗎? (あなたは先生ではないのですか) 是, 我不是老師, 是学生。不是, 我是老師匠。

你不是老師嗎? (あなたは先生じゃないんですか) 是, 我是老師。不是, 我不是老師, 是学生。

しかし、肯定疑問文と否定疑問文で内容肯定の場合に異なる返事をする言葉は沢山あります。

フランス語では、肯定疑問文に対する肯定は ouiで、否定疑問文に対する内容肯定は siで答えます。

Vous allez bien? (Are you fine?) - Oui, je vais bien. Vous n'allez pas bien? - Si, je vais bien.

ドイツ語でも同じで、内容肯定には daではなく dochを使います。オランダ語 jaとjawel、スウェーデン語など北欧諸語の jaと jo、ハンガリー語の nemとdeも同様です。ドラヴィダ語族のマラヤラム語も同

じだそうです。Haben Sie keinen Hunger? (Have you no hunger?) -Doch, Ich habe Hunger.

英語でもかつてシェイクスピアの頃まではより細かい使い分けがあり、肯定疑問文に対する応答としては *yea* と *nay*、否定疑問文に対しては *yes* と *no* が使われていたそうです。ルーマニア語も同じ四分システムで、肯定疑問文には *da* と *nu*、否定疑問文には *ba da* と *ba nu* を使うそうです。

この他、イエスやノーに相当する言葉がなかったり、あってもあまり使わず、動詞を繰り返して答える言葉もラテン語や中国語をはじめ、ケルト諸語やフィン語など沢山あります。

## 否定文

否定文の作り方には主に次のようなものがあります。大きく言うと否定語が動詞の前または後ろに置かれます。やはり幾つかの否定方式をもつ言葉が結構あります。なお、動詞に接頭または接尾すると否定辞、分かち書きするものは否定副詞ということになります。

否定副詞を動詞の前に：スラブ諸語 **ne**、ラテン語 **nōn**、イタリア語 **non**、スペイン語 **no**、ポルトガル語 **não**、ルーマニア語 **nu**、ギリシア語 **δεν**、グルジア語 **ar**、インドネシア語 **tidak**、タガログ語 **hindi**、タイ語 **mai**、クメール語 **mun/ ្រុត** (名詞文では **mun meː**)、朝鮮語 **an**。モンゴル語でも硬い文章では動詞の前に **ül**または **es**を置きます。

法や時制などによって異なる否定詞を使う言語もあります。中国語 不 (有の否定には 没)、ベトナム語 **không** (完了の否定には **chưa**)、ヒンディー語 **nahīn** (不定詞や命令形の前には **na**)。

アイルランド語でもやはり動詞の前の文頭に、現在形には **ní**を、過去形には **níor**を付けます。ウェールズ語では助動詞 **yd**-に接頭辞 **d**-を付け、主語の後に否定副詞 **ddim**を付けて、**d-yd**+主語+**ddim yn**+動名詞の形で否定形を作ります。つまり、助動詞と主語の後、主動詞の前に否定辞を置きます。

アラビア語では動詞の前、つまり文頭に否定語を置きますが、時制によって使う否定辞が変わり、また動詞の形も肯定文と異なることがあります。**kataba** (書く)の三人称単数男性形で例示すると：過去 **mā kataba**、**lām aktub**(短形)；現在 **lā aktubu**；未来 **lan aktuba**(接続形)。

バスク語は、基本的に **SVO**型でかなり自由な語順ですが、肯定形では焦点語の次に主動詞が、否定形では焦点語の次に否定辞 **ez**が来るようです。たとえば否定文で文頭 (主語があればその後) に否定詞 **ez**を、その後に動詞を置くようです。**Jonek ikusi du Miren** (John has seen Maria) **Jonek ez du Miren ikusi** (John has not seen Maria) マオリ語では、肯定文では動詞句が文頭にきて主語はその後になりますが、否定文では否定副詞 **kāhore**が文頭にきてその後主語が続きます。

英語では否定詞は基本的に動詞の後に来ますが、**never** は本動詞の前 (助動詞があればその後) に来ます。日本語では基本的に動詞の後に否定語を置きますが、古代には禁止の場合にナを動詞の前に置いていました。

否定接頭辞を前置：ラテン語 **ne-**、リトアニア語 **ne-**、ペルシア語 **na-**。

チベット語では接頭辞を動詞の前に置きますが、時制などによって異なる形を取り、現在形と未来形には **mi-**、過去形と命令形には **ma-**を付けるそうです。

否定助動詞：フィンランド語には否定の助動詞があつて **en**、**et**、**ei ...**と人称変化しますが、時制変化はせず、現在形は動詞の現在語幹を、過去形は能動過去分詞をその後置いて表します。近縁のエストニア語では **ei** が無変化になっています。

**Fin. Hän puhuu englantia. (He speaks English) Hän ei puhu englantia.**

満洲語以外のツングース諸語でも否定の助動詞 **e-**が本動詞の前に置かれるようです。

否定の人称接頭辞：スワヒリ語では動詞句の先頭に **a-**などの主語標識が付きますが、否定用の主語標識 **ha/hu-**を使って否定を表します。他のバントゥー諸語も同様と思われます。

**Anazungumza Kiingereza. (He speaks English) Hazungumzi Kiingereza.**

否定副詞を動詞に後置：ゲルマン諸語のみ、not、nicht、オランダ語 niet、スウェーデン語 inte、デンマーク語 ikkeなど。ゴート語やアイスランド語も同じです。ただし、ドイツ語では、かつての古高ドイツ語でロマンス諸語と同様に動詞の前に否定副詞 ni を置いていたのが、中高ドイツ語で niが ne または動詞に接頭する en-に変わり、9世紀になると動詞の後に否定補足語 niht/nie (nothing 何も) が添えられるようになり、13世紀以降に ne/en-が次第に弱化し脱落して、動詞+niht (nicht) の形ができたと言われます。英語でも同様に ne+動詞が ne+動詞+noht/nought (nothing) となり、次いで動詞+noht (not) になったそうです(そして、その後に助動詞 do が登場します)。

But I seye noght that every wight is holde (But I say not that every one is bound, Chaucer)

他のゲルマン諸語も同じで、もとは多くの欧州語と同じく否定副詞を動詞の前に置く標準の形だったのではないかと思われます。分詞、動名詞、不定詞などの準動詞で not をその前に置くのは、ドイツ語などでも同様で、昔の形が準動詞では残ったものでしょう。

否定接尾辞を後置：日本語のような膠着語では動詞語幹の後に否定辞を置くことが多くなります。トルコ語では語幹の直後に -ma を置き、モンゴル語では語末に -güi を、満洲語では -kū (akū “ない”の短縮形) を置きます。

朝鮮語には、動詞の連結語尾(連用形) -ji の後に否定の助動詞 anta を置く用法もあります。

タミル語では動詞に -illai を接尾し、人称語尾は付けません。

ベンガル語では文末に nā を置き、完了形には -ni を使います。

二つの否定詞で動詞を挟む：フランス語では動詞を否定詞 ne と否定副詞 pas や point (ちつとも) で挟みます。これは否定を強調する副詞との組合せが慣用化したもので、ne だけだと弱いため常用されるようになったとみなせます。口語では pas だけで否定を表すこともあります。これは先述の英語やドイツ語の変化を後追いしていることになります。イタリア語 non … mai (never)、スペイン語 no … más (no more) などニュアンス付きの表現でもこの形をとります。

ビルマ語でも、動詞や形容詞を ma … bhū で挟みます。

否定詞を主題語の前に：ハンガリー語 nem

Peter nem a szobában olvas könyvet. (ペーテルは部屋で本を読んでいるのではない)

古英語では母音または h や w で始まる動詞に ne が前置し縮合してできた、nesan (to not be), nabban (to not have), nyllan (to not want), nytan (to not know), nāgan (to not own) などの否定動詞がありました。

否定be動詞：専用のbe動詞否定形をもつ言葉も沢山あります。

繫辞copulaの否定(でない)では、アラビア語 laysa、トルコ語 değil、インドネシア語 bukan、韓国語 anida、モンゴル語 bish などがあります。

存在の否定(ない)では、アイルランド語 níl、トルコ語 yok、モンゴル語 alga、タガログ語 wala、韓国語 eopta、アイヌ語 isam などがあります。

ペルシア語 nīstan は否定詞 ne とbe動詞 hastan が融合したもので、繫辞と存在の両方に使います。サンスクリットの nāsti も同様です。ベンガル語にも否定詞と be 動詞が融合した形があります。ハンガリ



一語には三人称のみ否定詞と be 動詞が結合した形 *nincs*、*nincsenek*があります。

なお、否定に関係する現象として、ロシア語に否定生格（属格＝所有格）というものがあります。否定文中の目的語が対格を取らず、生格など別の格を取るというものです。存在文の主格も別の格になります。この現象を示す言葉には、ロシア語の他に、スラブ諸語のポーランド語、ウクライナ語、バルト諸語のリトアニア語、ラトビア語、ウラル諸語のフィン語、エストニア語があります。ウラル諸語の場合は分格になります。

Fin. En antanut hänelle kirjaa (I did not give him the book)    Kaupungissa ei ole tehdasta (there is not a factory in the city)

二重否定：この他に、ゲルマン諸語では、否定冠詞・否定形容詞 *no*、*kein*や否定の不定代名詞・不定形容詞 *nobody*、*niemand*などを使って否定文を作ることができ、否定副詞（*not*など）なしにそれだけで否定文になります。それに否定副詞を加えると肯定になります。こうした二重否定を採用している言葉は意外と少なく、206言語中でわずか11語だそうです。この二重否定は、文法家の規範意識に依るところが大きいのと思われ、方言以外でもそれに従っていない例は結構見られるそうです。

フランス語とルーマニア語を除く他のロマンス諸語では、否定代名詞などが文頭に立つときだけ否定副詞が不要になり、それ以外の場合は否定詞が必要です。

Niemand kann in den Himmel fliegen. (No one can fly in the sky.)

Sp Nadie puede volar en el cielo.    Contra la naturaleza no puede nadie.

一方、フランス語、ルーマニア語、スラブ諸語やバルト諸語、ギリシア語などではそれだけでは否定にならず、別に動詞に対する否定辞が必要です。否定の不定代名詞のあるハンガリー語、ペルシア語、トルコ語なども同様です。この形も二重否定と呼ばれていますが、区別のため重複否定と呼びたいと思います。

Personne ne peut voler dans le ciel.    Cze. Nikdo nemůže létat na obloze.

Per. Hichkas nemītavānad dar āsemān parvāz konad.

また、*not yet*を一語で表し、したがって別の否定辞は不要な言葉もあります：ベトナム語 *chưa*、マレー語 *belum*。*not either*を一語で表し、したがって別の否定辞は不要な言葉もあります：ハンガリー語 *sem/se*、*sincs/sincsenek*。

総括すると、主語と述語を倒置して疑問文を作り、述語の後に否定詞を置いて否定文を作るゲルマン諸語（＋フランス語）は世界の言語中ではかなり特殊であり、それに加えて代動詞を使う英語は極めて特殊だということになります。